



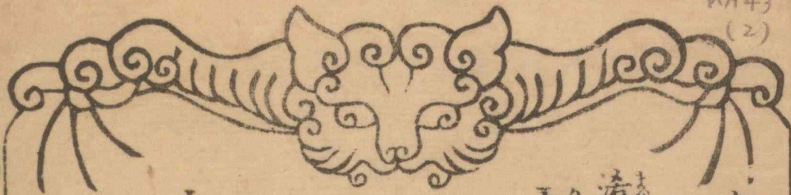
假名垣魯文著  
守川周重画

上

163599



K939  
KA43  
(2)



高橋阿傳  
夜叉譚  
全松堂  
第ニツ編リ之巻



傳奇ハ劇場の謂小ト電機ハ傳信の機関ありされバ毒婦ヲ  
傳目今江湖小その記と成し彼處もハ傳此處も甘辛いと混  
淆テ外題の精製画組で威し手柄ハ仕勝發兌の速いことこそ  
互々不競ハ記者も各自筆鋒と光らそ中の流行遅き  
老黄鳥も谷より出て若木の梅の鎗先よ抵抗と  
みハ非ぞと虫も強ての依托よだろく急案せんく  
太鼓の音を逸れ二の午まを小二編の首尾合ま  
續りと社用ハ他事なく夜延の燈下よ油を減らま  
猫々老爺が七変化新聞雜誌の突筆何でも持て  
こハヤテあませりこ安受負ガ重荷とあり苦中の樂  
書行成一序也

明治十二年二月

假名垣魯文戲誌

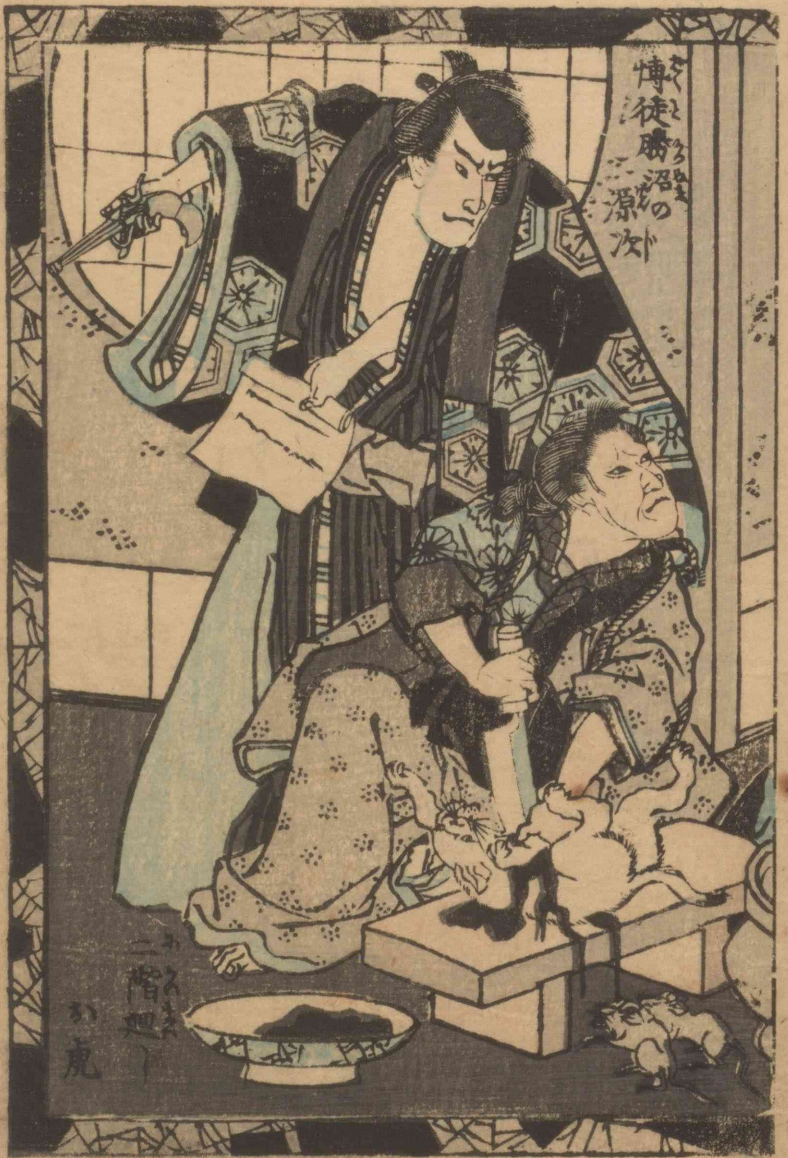




甲府  
柳町の娼妓  
花山  
実阿傳

高橋  
波之助

博徒  
勝沼の  
源次



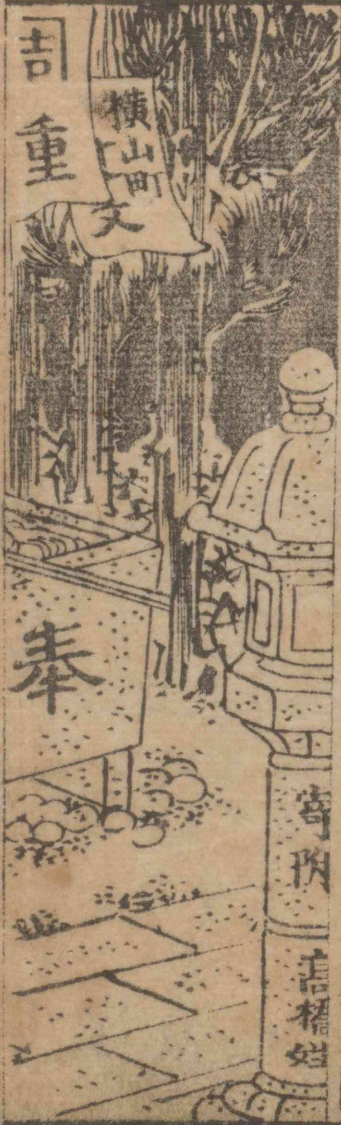
二階  
虎



高橋阿傳夜叉譚上之卷

假名垣魯文補綴

月よみどよとんとんこのなうららん同ト昔の影と見る小も夫よあ  
 で旧情と語るもさまが面目なしと彼鬼清も血筋の恩愛こが子の為  
 ろのひうさきて一時もはやく親子の名のつと遂んとま且ど其便宜なて  
 空しくも過せしよか傳が本夫波之助と今市の喧嘩のどふ入て親意と  
 結びとろふ高橋の家立入あや波之助も近ごろの農業はうちまふ  
 賭よの身とやうしち傳も好むとちなれば養父が右門が捕まらう後夜叉





鳥羽

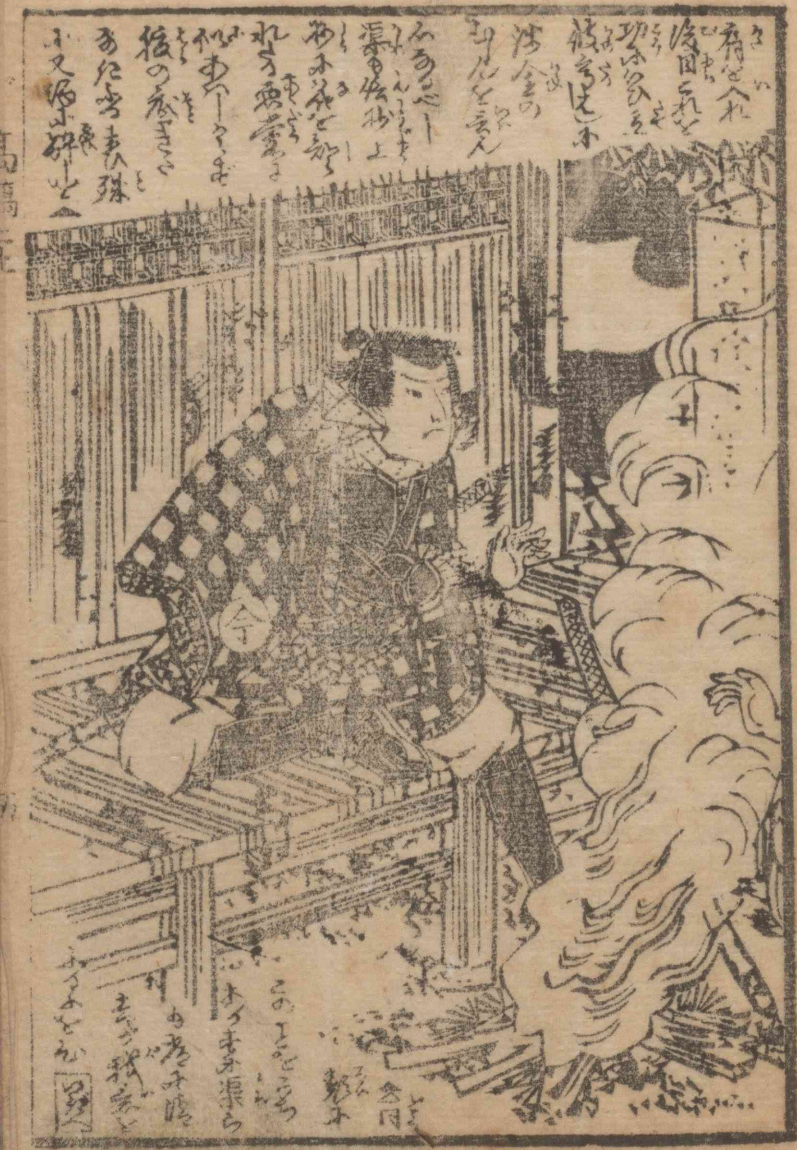


その夜と  
かた  
めい  
ほう  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし

○巻よ又日光に懐令あふくさるる  
波の勢とらんとの  
かのお  
助のて

あふくさるる  
かた  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし

まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし



おのれ  
あふくさるる  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし

あふくさるる  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし  
まのし

鳥羽



老めらとあつあ  
 て務負の甚と  
 開たの甚と  
 うまうとまうよ  
 くれこの混雑よ  
 うち給まう橋  
 うまうとまうよ  
 空峰とまうの  
 不意と清者  
 うち果し場  
 猶あり金うた  
 ささひゆへん  
 ありと團扇



高島三

つか  
 りつどや  
 波し物と  
 獲の麻  
 方  
 かの  
 一件と  
 一  
 橋  
 橋へた  
 まう今  
 波し物と



さん此  
 月  
 中  
 男  
 故  
 お  
 その  
 の







細者よ  
 振ひおしよ  
 と突筋よ  
 かの竹漣  
 と引さるる  
 加他へ南を  
 さんちうと  
 腰の活刀  
 ぬたえまー  
 打てからと  
 身を切らた  
 破竹漣を  
 細者よ 振後をと



実アッ  
 ぬたえまー  
 のけ  
 さあま  
 例え  
 たり

官 朝鮮  
 許 牛 肉 丸  
 名 法  
 中包  
 小包

官 天 泰 丸  
 許

笠 地本問屋  
 錦繪  
 金松堂  
 出板  
 明治三年七月十七日

此天泰丸と云ふ身一たんせだのせん  
 せくのりもあつゝ名やく匠久人  
 此天泰丸と云ふ身一たんせだのせん  
 せくのりもあつゝ名やく匠久人

編輯人 伊東 東 寺  
 日本橋區横出三丁目二番地  
 出板人 辻 岡 文 助

高橋阿傳 夜叉譚 二編

中



# 電信局

偽名恒身文深旅

高橋於結二編中

金招巻素梓

茂里川因を重圓

本編の記者一吸煙のあはれ大方の看客へ出奉る

前二発免の初編三千部中初賣の五百部ハ

校合甚ど處漏し一と殊は第三の巻ハ

丁目ハ記者の目分量少しく違ハ

活字一行餘とるを印工の杜撰

その事を記者ふも告ぐ霧間

夢中ハ文と縮め假名と漢字

ハ換えたるを以て結句文と成

るハ記者此事と後ハ知り訂正

ハ一たれと最初の部と讀む心

諸君子ハ必定驚き給ひしあらん

又初編清吉ガ小傳中文政二とあるハ

弘化二の誤りガ傳ガ出生嘉永三とあるハ  
 亦年の誤り依て當編之と謝す



高橋阿傳夜叉譚二編中之巻

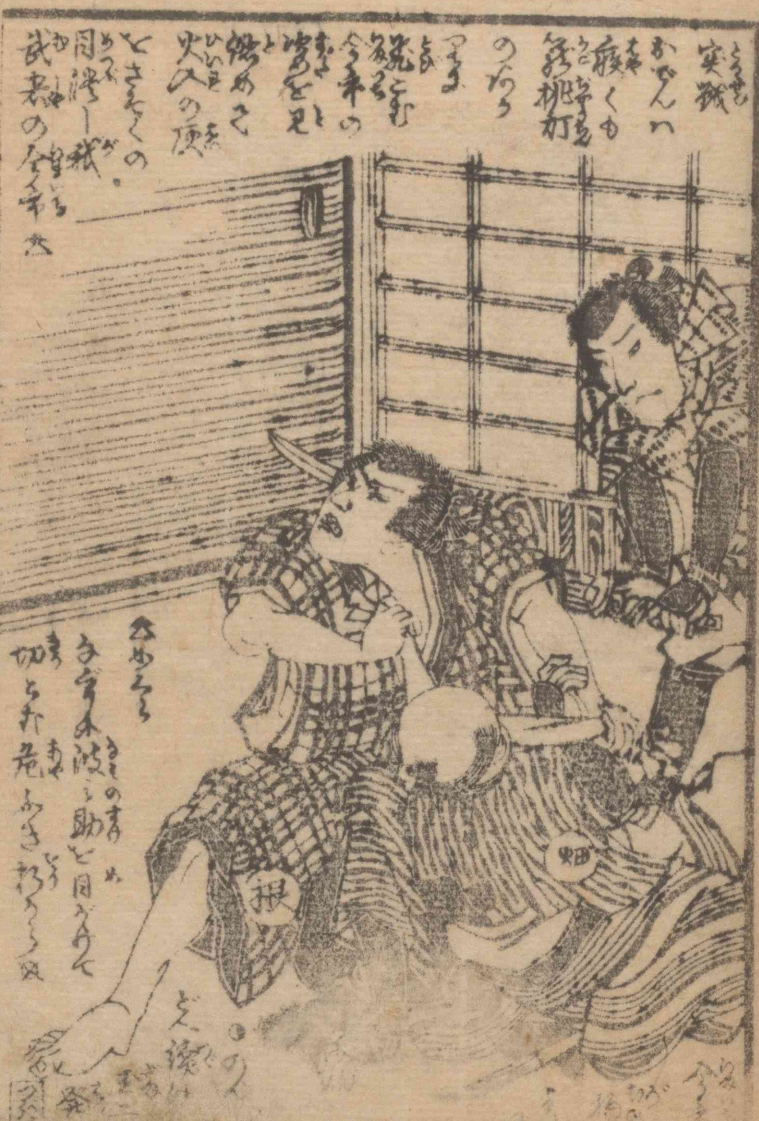
○第五回 修羅鬪場よ紅蓮池と生ま

假名垣魯文補

再び説根太郎ハ暗きよ紛れ賊ハ仲間の畑さくとも知らまゝ突伏  
なやうどめくと手拭ひの布り止命の背後より物ともいへ根太郎  
が肩先深く切伏るハ別人あらま今市る血涙ま流るま強刃ひさげ目  
ぎま仇の鬼清めを是非うちあんと阿修羅のどく奥へ踏む夫ら



又さる  
修羅よ  
かかす  
担  
さね花の  
深丸ハ



突抜  
かかんハ  
寝くも  
寝枕打  
のち  
今年の  
波を見  
燃めこ  
火入の原  
とさるの  
同様に我  
武者の金

根  
と後  
切られ危あさ  
さるの  
今市る  
血涙ま流る  
ま強刃ひさげ  
目



おんいさも  
おんいさも

おんいさも  
おんいさも  
おんいさも

おんいさも  
おんいさも

おんいさも  
おんいさも



おんいさも  
おんいさも  
おんいさも

おんいさも  
おんいさも

おんいさも  
おんいさも

おんいさも  
おんいさも  
おんいさも



おんいさも  
おんいさも  
おんいさも



ついでに、  
 方外の因の廻へるも、  
 愛嬌と着て  
 我家へ



▲左の  
 来ぬは保徳此の  
 後らぬそのひまふ  
 七若くは徳とまを  
 生ふあもと波の  
 恥は強き者な

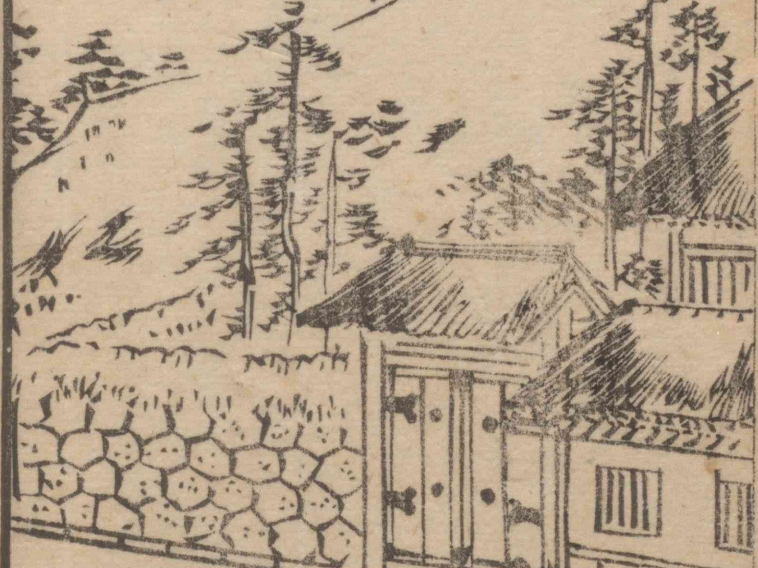
の  
 梅  
 の



▲右の  
 して細作藤屋の  
 死骸と押とこよひは  
 明よを且た是脊負  
 出ぐ  
 人負ふ  
 うらむ  
 後不悔  
 もその甲斐  
 色羽子の夜  
 まよき小雀の英み  
 先の望みまう根を  
 今希のふたかへ

の  
 梅  
 の

つぎせやく  
 竹陰と  
 刀七  
 添く  
 舞る  
 者といハ  
 文みき  
 柳の月夜  
 雅集  
 看かて海へさ  
 よう 権後  
 沙路よび



一巻  
 外きて  
 右の後  
 突破  
 お徳も又  
 相旭  
 波と助  
 戦ふ侍人  
 さあある  
 とたその切  
 先々のののみ  
 道と受之と  
 結まらへ侍者

うど波  
 我家のを候  
 中よは出さ  
 唯今  
 のと中半  
 多くもま  
 とをあるハ  
 後の侍  
 の打ツ  
 此夜  
 小舟  
 船地  
 澤丸



よ  
 止ま  
 病  
 と和  
 山  
 おん  
 ハ  
 と  
 方  
 大  
 花  
 お  
 入







このついでに  
 為さずしてのねんかしの血  
 まわのおでんが成長を  
 流さぬ女はあつとを憐れ  
 老の為し願ひを  
 生らさぬ  
 ての

猪頭  
 せんとせよ  
 せぬのそと  
 己子の  
 母  
 日暮り  
 急業の勢へて  
 急業の勢へて

今もなごう  
 居る内  
 雨のまじり  
 飲め  
 と  
 せよ  
 と  
 せよ  
 と  
 せよ  
 と  
 せよ

公  
 由  
 身  
 の  
 わ  
 と  
 せ  
 の  
 勢  
 へ  
 て  
 急  
 業  
 の  
 勢  
 へ  
 て



銅版開化王編

全

開化女用文章

全

漆崎延房編輯

近世紀聞

初編ヨリ  
十巻迄出版  
以下追々発売

夜嵐阿鬼槍花仇夢

五編  
大尾

同編輯  
鮮齋永濯再

義烈回天百首全

同編輯  
假名垣魚夏編輯

高橋阿傳夜叉譚

八編  
大尾

金花七變化

三編  
出版

濡衣女鳴神

十編  
大尾

守川周重再

出版 御届明治十三年七月十七日

全地本問屋

錦繪問屋

金松堂

出版 辻岡文助

助

浅草花川一丁目  
 伊東三郎方角序  
 編輯人 伊東三郎  
 日本橋區横山町三丁目二番地



金松堂辻岡屋文助

下



高橋於傳

夜及物語

二編

下の巻

魯文著

周重画

十文版



御泊宿

真誠講

牛肉丸

天泰丸



高橋阿傳夜及譚二編下之巻

○第六回

擊劍術と傳へて

福災と撮ふ

初夜の鐘

旅籠屋の二階

客の耳

中仙道の往還も絶え一板鼻驛の初夜の鐘旅籠屋の二階客の耳

敷の一群の此地廻りの破落戸あまの命もあつ波や緑の林立

まする鹿長男の大坐偶偶女よ酌とさうせ破ま三味線調子小

假名垣魯文補綴



外色

隣りの奥の中小男の  
且話熊ノイキ

濁たる

声の

侍

可

可

人

よ

と

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま

ま



ん丸の丸坊  
踊り杯盤狼せさこの場は倒る

半  
娼妓は引れて  
踏く踏くをのく

圍房よ入る跡の岸の



ね

枯野の

物音絶

の仕切の

百り

つひに今の

ざらな

やう

う

う

う

う

う

う

う

う

う

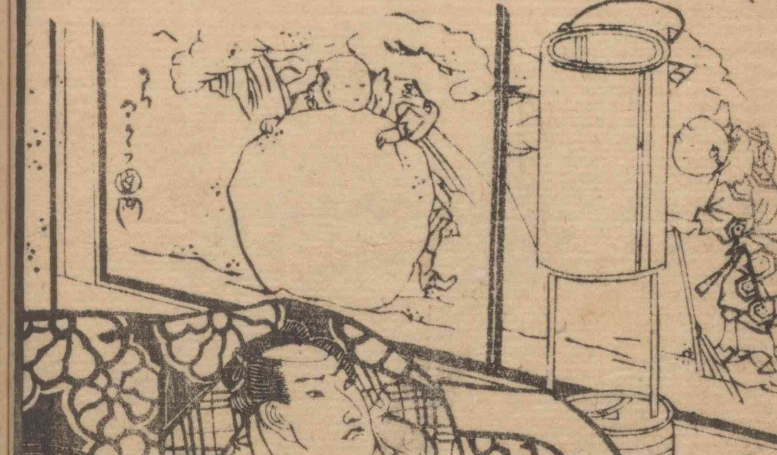
う

う

う

う

と奉ひ  
湯治と  
茶湯  
女郎  
村の  
おの  
おの  
おの  
おの  
おの  
おの



と奉ひ  
湯治と  
茶湯  
女郎  
村の  
おの  
おの  
おの  
おの  
おの  
おの

途中小  
休世阿魔  
小路舟も  
供  
おの



と奉ひ  
湯治と  
茶湯  
女郎  
村の  
おの  
おの  
おの  
おの  
おの  
おの



ついでに人形見物  
 なり立寄るものありて  
 あつたひ



青二才とて勝負の半  
 慰を井戸の蛙の世間見す  
 木のまを村のその外で

ハ森の子  
 のさるわの  
 ヤイ馬吉  
 も雲もとも  
 かつら  
 てー  
 ま  
 ぶ  
 ぶ

知らず者ありて自惚の  
 吹聴聞く早う裁きまはせ  
 荷物を持つてさるて由來  
 ざる懐中にある路用  
 の金荷物くちめ置て  
 ゆけとまをひきりれ  
 か敷の傍より 撤はるる  
 迎刺の下衛らまが世渡り  
 見事剥るるものも春よ  
 女あつても 劍術の一手の  
 腕一覚えがあらサア渡は  
 まんりかして帯の  
 あらとり 取出す短刀  
 渡の助も脇ざら  
 柄一手をうけ身  
 構へて寄しん



ぞろろの  
 杖の加勢  
 そめと  
 と八夫婦の  
 ぞろろ  
 かんや  
 をとんは  
 まんと

三つ

五

ひめくちり  
 柳舞の方より  
 ひろの武士  
 幸徳天をりふい  
 場をさつみ  
 茶のま  
 なる然  
 ありんせ  
 突然  
 と激速く  
 是が所りと  
 うせ  
 む六る



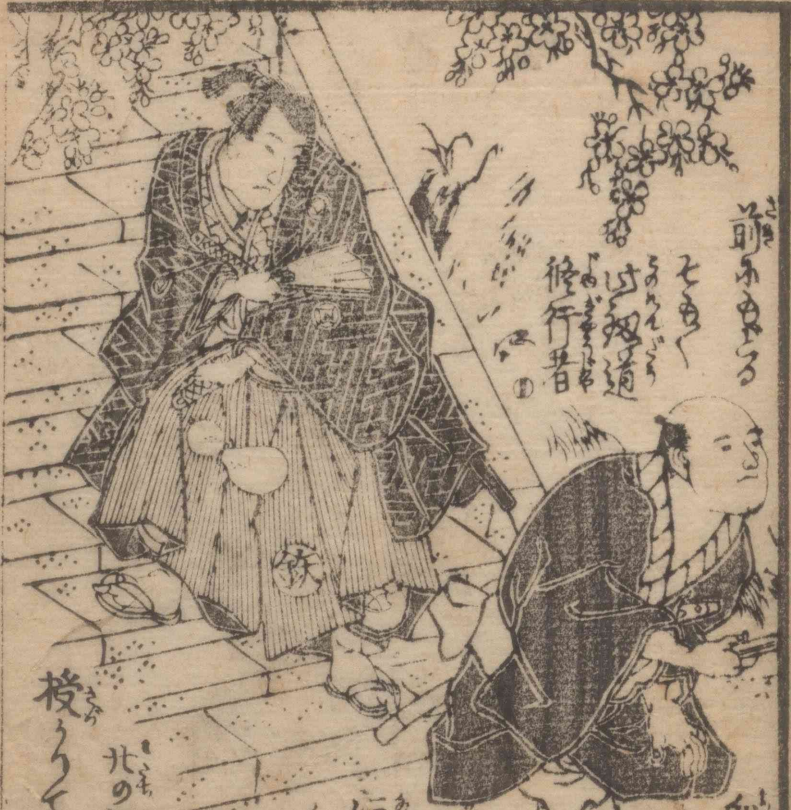
逃るを  
 知らせ  
 へ  
 松多  
 徳い  
 と  
 徳  
 徳  
 徳

まの機よ  
 雨をうち  
 夏衣よ  
 茶と  
 深か  
 まと  
 見向も  
 中ぞ八巻が  
 膝ふた  
 弱縁松  
 んでちりら妻  
 せよ投倒まこの  
 勢ひふま  
 あまの保まを身とふい



まらふか徳い  
 うら  
 配に父九  
 ありの忠へ  
 ひ  
 中  
 妻のあふ左力の  
 高南安屋  
 眞の助先生  
 徳生海分危  
 徳い  
 徳い  
 徳い

高高一下



前より

七色く  
はね道  
修行音

血統のあらはれ  
十二支の

刀竹助由ある  
その本

叔父

何某の良の助を由

一の父の職に至ると

師のついでに勉

強後

北の師傳の印可を

授うて二藩中より肩を



つれづれ  
名もてり  
きつさんと彼れの本

きつさんと彼れの本

きつさんと彼れの本

居る老僕を

荷物を擔をせり

茶店  
下り

下り

ゆきぬ

○話説ニツ

分りて今より三とせ

齋藤良の助実亮と  
武士の常陸旧小藩の家士

代つて父祖の

藩士

叙道の師

靴を職と

し実亮

父母を

はるあひ

叔父の爲に成長ありが性  
来文武は疎うを殊あ

候ふる仕士

とてゐるに程あり

よりその師同藩

総生要入のその

身六十小をうたて

藩士へ指南の物

悪交れと我子石松ハ

幼年の微弱あり

女子あれ此実堯より

流儀の要を傳へる者

又ある事と思ふより

未だ母しを思ひる

一服と瘦  
御休所

年廿五と願ふ酒色不耽るの癖あり

深きあれ共業術の免許を治てはるる

規よかれ禄を給さる珠は奸戈ある者あれ

君側へ阿諛ておぢえめさる況てその父ハ

手役あれ我家暴慢の者初まの

或年の弥生中旬城下外の観音山ハ

地主の櫻をうじり盛りとせん

奴僕をさる人小を丘より後あり

重役

松永

某の

折々同藩

おまのの小婢ひとり召連て観音堂下り下り行を

その容色の傍をさる見惚つるありべは問あ

あれこそ一藩のまき年常あ縁てんをあや

給ふ怒せる嬢さんおまづどのあておをさ

ありと聞て鉄紗の煩悩の犬小

追ふんのもいん不圖うこそ

らをんや目小女申あぎの落

るを拾ひとりてありべよのあうこの

肩こそ石坂を下り行さるれ遠み

彼別嬪が遺失せし小疑ひあは疾

追ひて後してころと命とく袴櫻小図





よの日和如何  
 夫ととほ  
 座机あつた  
 ちやうとあつた  
 後ゆいものど通

席の  
 奥

軒休野

十客  
 美東

當世雜談

松林

伯圓

石ころの  
 縁に  
 縁に  
 縁に

獨場  
 沸騰

至乃

物とつて  
 五分  
 至乃

石坂下の茶店の床机は想ふを  
 愚老々ふるを張儀の  
 妻の被父母を説  
 口をさかして令をうあ角堀酷いと  
 母の君の奥さん  
 媒妁してやわす  
 若周  
 旋のとく  
 日若千の謝  
 墨斗ふあふく  
 ぬたさう彼扇小  
 まるかきけり書  
 石坂下の茶店の床机は想ふを  
 愚老々ふるを張儀の  
 妻の被父母を説  
 口をさかして令をうあ角堀酷いと  
 母の君の奥さん  
 媒妁してやわす  
 若周  
 旋のとく  
 日若千の謝





銅版開化玉編 全

開化女用文章 全

近世紀聞 初編ヨリ  
十編迄出版  
鮮齋水滸再  
峯道考發兌

夜嵐阿鬼花仇夢 五編  
大尾  
男川俊雄開  
永島道并再  
國本勘造作

義烈回天百首 全  
同編輯  
假名垣魚夏編輯  
高橋阿傳夜叉譚 八編  
大尾  
守川周重再

金花七變化 三編  
出板  
國貞再  
秀賀作  
濡衣女鳴神 十編  
大尾  
關貞再

高橋阿傳夜叉譚 八編  
大尾  
守川周重再

濡衣女鳴神 十編  
大尾  
關貞再

全地本錦繪問屋

金松堂 出版  
過岡文助

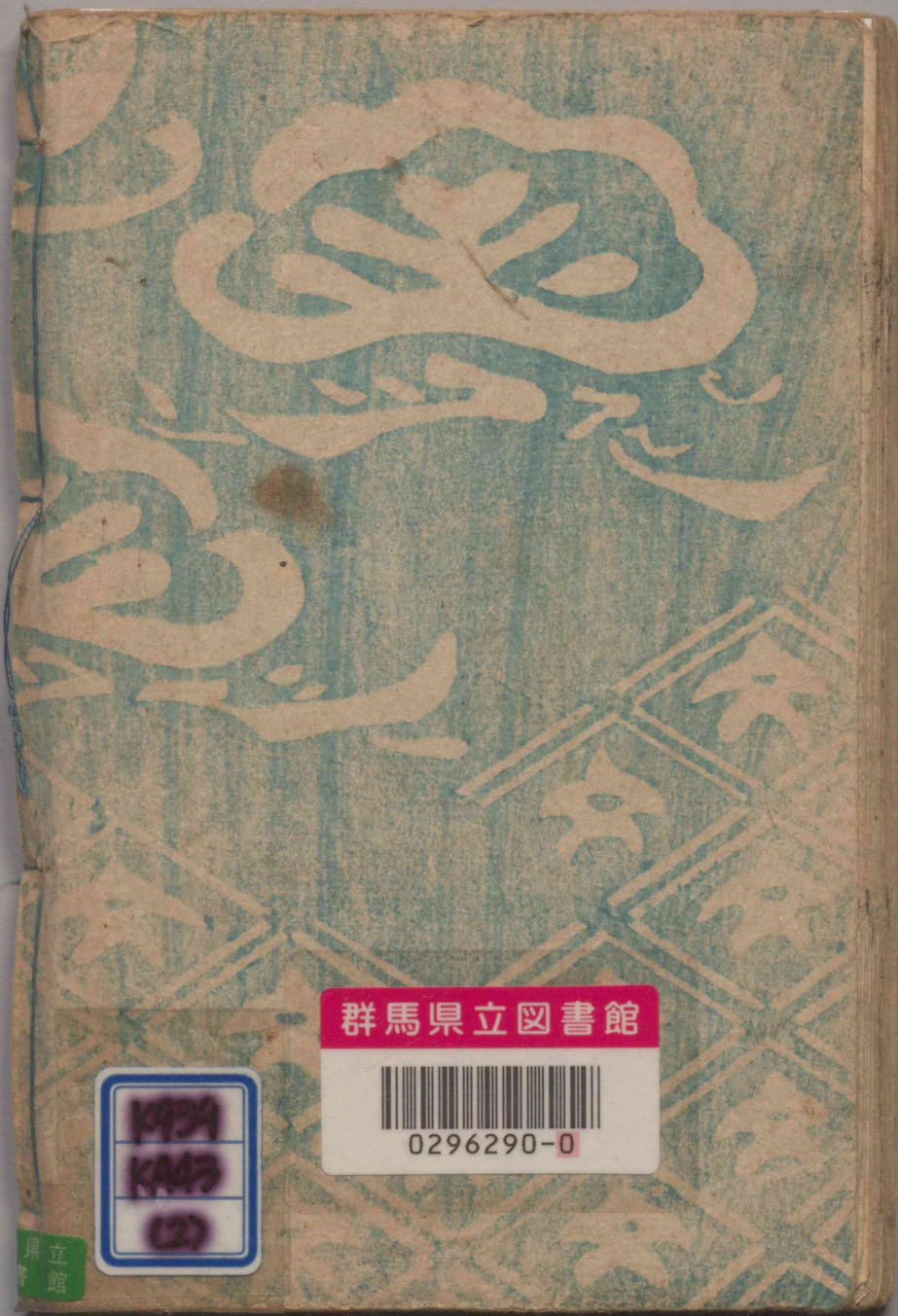
出版御届明治十一年七月十七日

淺草花川一番地  
伊東彦三郎方問屋

編輯人伊東彦三郎

日本橋區橋山町三丁目二番地





群馬県立図書館



0296290-0

K43  
K43  
C2

県立  
立館